



成瀬「赤い情熱」

取り戻した一体感。新監督とともに新たなスタート

成瀬高校

【住 所】東京都町田市成瀬7-4-1 【創 立】1978年 【甲子園】なし
町田市にある都立高。「高い知性と創造力を培う」、「広い視野をもち、品格のある豊かな人間性を養う」、「若さあふれる健康な身体をつくる」の教育目標のもと、社会をたくましく生き抜くリーダーの育成を目指している。



昨年4月に待望の新監督を迎えた都立成瀬。新たなチームの象徴として「情熱の赤」を掲げ、2019年の快進撃を誓う。
(取材・三和直樹)

■ 始まったチーム改革

2018年4月、赴任早々に野球部のグラウンドに足を踏み入れた中村和彦監督は、眉をひそめ、つぶやいた。「まるで元気がない。野球部とは思えない…」練習試合をしてもまとまりを欠いた。「一生懸命やってはいるけど、チームとしての形がなかった。ただ投げて打つだけ。攻守交代もスムーズじゃない。戦い方を知らず、戦うための準備もできていなかった」。前年の夏から2度に渡って監督が変わり、落ち着く間がなくチームにまとまりがなかった。

だが、奥に秘めた心は折れていなかった。むしろ飢餓感があった。「子どもたちの中にある意味、飢えていた部分があったんだと思います。まずはチームとして戦う意識を植え付ける。素直な子たちなので、すぐに変わりましたね」と中村監督。都立高6校目で指導経験豊富な新監督のもと、部員たちは厳しい練習を受け入れ、歓迎し、懸命に汗を流した。

ようやく見えた目指すべき道。主将の平田琢磨(2年)は「それまではいろんな不満や戸惑うこともありましたが、中村先生に来ていただいて、毎日、丁寧に指導を受けてきて、だんだんとチームが一つになってきた」と確かな変化を感じている。

■ 真っ赤な練習着

改革の象徴は「赤」だ。まずは見た目から。以前は部員がバラバラのシャツを着て練習

して色も黒やグレー、紺などの暗い色を着る部員が多く、「雰囲気まで暗かった」と中村監督。そこで「まずは色で目立とう。情熱の赤。燃えるようなチームになろう」と、新チーム発足直後にチーム全員が着用できる統一の練習着を作成し、普段から全員がその“赤シャツ”を来て練習。「赤シャツで揃えて統一感が出ましたし、気持ちの部分でも変わったと思います」と平田主将は語る。

また、公式戦のユニフォームも一部変更し、ズボンのサイドに紺の一本ラインを入れて“新生・成瀬”をアピール。グラウンドは他部と共用で、照明設備もなく、環境的には決して恵まれている訳ではないが、その中でソフトボール、テニスボール、サンドボールに10種類以上のティーバッティングなど工夫を凝らした打撃練習に加え、目標シートや振り返りシートで意識付けも続け、多くの練習試合をこなしながら“勝つ術”を身に付けていった。

■ 秋の収穫を胸に

秋の大会では、早くも改革の成果が出た。

ブロック予選1回戦を13対0で大勝すると、代表決定戦では6対5の僅差で都立青山に勝利。「追い上げられた中で何とか踏ん張った。以前ならば逆転されていた」と中村監督。「それまでの練習試合でも少しずつ内容が変わってきて、序盤に点を取られても後半になって追上げて逆転するゲームができるようになっていた。最初に比べてチームの雰囲気はだいぶ変わった」。続く都1回戦では守備のミスから失点して0対5で日体大荏原に敗れたが、本大会進出は成瀬にとって初めてのこと。収穫は多かった。

「秋はいい経験になった。大会前の調整も学べたし、冬に向けての課題も見つかった」と平田主将。中村監督は、「まだまだ未知数。まだまだ勝負弱い」と道半ばを強調しながらも、「町田をはじめ近隣の中学生在が都立でやるなら成瀬に行きたいと思えるようなチームにしたい」と夢を語る。目標は夏の大会2勝以上、ベスト8、そして神宮で戦うこと。その先に、甲子園を目指せるチームになるというステップが見えてくる。「情熱」を身にまとった成瀬ナインが、自分たちの新しい時代を作ろうとしている。



勝ちトシ 勝つための秘伝トレーニング 情熱の赤シャツ

3年生6人が引退した後の新チーム発足後、中村監督の掛け声のもとで作成した練習着。左胸には「NARUSE」の文字。汗が素早く乾き、日々の洗濯に耐えるだけでなく、チームに一体感を与え、暗かった練習の雰囲気を明るくし、気持ちまで情熱的に激しく“真っ赤”に燃やす。そして「どこにいても目立つ」と中村監督。その効果は図り知れない。



1961年生まれ東京都出身。調布南―日体大。松が谷、南多摩、日野台などを経て昨年4月に成瀬に赴任。赴任と同時に野球部の全権を任され、再建を託される。「野球と日常生活はリンクする」と指導に当たる。保健体育科教師。

成瀬・中村和彦監督 努力は必ず報われる

「個の力がない中で、いかにして勝つかというのが都立高のテーマ。どれだけ意識を高く持って、どれだけ集中して練習に取り組めるか。普段の学校生活が乱れると野球でも失敗する。高校生というのは打算のない努力ができるとき。社会に出ると理不尽なことが多くあることも確かなので、それに耐えられる力、頑張り切れる力を身につけてもらいたい。野球は他の部と違って、周りからの注目度が高いですし、野球部員には周りから見られているという意識を持って襟を正して生活してもらいたい。努力は必ず報われる」

力投派の本格派エース 富崎隆(2年＝投手)

「1番の武器は真っ直ぐ」と語る成瀬のエース。中村監督も「体は細いが、ボールにキレがある。バッターとの間がよくて、打ち崩されるということがめったにない」と高く評価する。力強いストレートの他にも、カーブ、スライダー、チェンジアップの変化球を持つが、課題は「もっと省エネで投げられるようにすること」。力投型で9回を完投するスタミナこそ持つが、球数が150球を超えることもしばしば。都1回戦の日体大荏原戦では8回途中で6安打も9四死球が響いて5失点(自責2)。「力不足を感じた」と振り返る右腕は、「強豪私立も抑え込めるようなボールを投げたい。球速も春には140キロ台に乗せたい」と意気込んでいる。

